



口移しの念仏

俳優の二木てるみさんは、子役時代の演技を振り返り、それは周りの大人たちから「口移し」で教えられたものだったと語ります。



私の仕事の環境って、口移しで「おかあちゃん」って言ってもらって、それを真似て「おかあちゃん」って言う。私にそう言わせるために、いろんな人たちが力を尽くしてくれたんです。そこには母もいるし、監督、助監督、アシスタントさん、衣装さん、小道具さん、大道具さん、それにカツラ屋さん…。

…おかげさまって言うけれど、本当にその通りなんです。

『随縁 つらつら対談』 釈 徹宗 著 より



この「口移し」という表現は、私たちが称(とな)える「南無阿弥陀仏」の姿そのものです。



私たちは、自分の意思で仏様を呼び、善行として念仏を称えていると考えがちです。しかし親鸞聖人は、その順序を逆転させました。私が称える前に私を呼んでいる声があるというのです。



「南無阿弥陀仏」は、人が作り出した言葉ではありません。阿弥陀如来が「あなたを必ず救う」と誓い、名乗りをあげ、それを数えきれない先人たちが口移しで、私の耳へ、そして口へと届けてくださったものです。

阿弥陀如来は、修行時代・法蔵菩薩のときに、次のような誓いを立てられました。

『仏説無量寿経』第17願(意識)

あらゆる世界の仏がたが、私の名を褒め称えないようなら、私は仏にはならない
(あらゆる者の口を借りて、必ず「南無阿弥陀仏」をあなたの元に届ける)

お釈迦さまが説き、七高僧が受け継ぎ、親鸞聖人が頭かにし、私たちの大切な方々(親・祖父母・ご先祖方)が称え、今、隣で誰かが称えている「南無阿弥陀仏」。そのすべての声は、阿弥陀如来が私に「南無阿弥陀仏」と言わせるために力を尽くしてくださった、壮大な「手回し」だったのです。

二木さんが、多くのスタッフに支えられて舞台に立ったように、私の「南無阿弥陀仏」という一声のお念仏の背後には、阿弥陀如来の慈悲と、それを伝えてきた無数の人々がいます。

私たちは、ただ口真似をしてお念仏申しましょう。その時、阿弥陀如来の願いが、大切な方々の願いが、私の口を借りて私自身に響き渡っているのです。

